



ぼくの終りが近づく



minakami

おわりのはじまり

不意に乾いた笑いが漏れてしまって、外へと聞こえていないか心配になったけれど、扉の向こうからは相変わらず物が壊れるような音や、相手を罵っている罵声が聞こえてくるのでひとまず安心安心。

もしここにいるのがばれたりなんかしたら、きっと殴られ、蹴られ、刺され、などと、とにかく酷い目に合うことだろう。それだけはできることなら避けたい。ただでさえお腹には痣ができていし、腕や脚だって痛い。体のあちこちに、まんべんなく傷がある。こんなのは厭だと最初は思っていたけれど、もう慣れた。意外にもぼくは、状況への適応が早いようである。でもわざわざ自分から痛い思いをしようとは思わない。いくらぼくでもそんなに阿呆ではないのだ。

幸いというべきか、ぼくの綺麗で素敵な顔にはなにもされていないが、それはきっとわざとなのだろう。顔なんかには痣なんかがあったりでもしたら、きっとそれを見た誰かが不審に思うことだろうから。だから服で隠される場所だけに攻撃を行う。体育での水泳などは無理矢理欠席させられるが、でもそれだけではだれもぼくが体中に怪我を負っていることには気付かない。それがやつらのやりかた。やつらはこういうときだけどうして頭が働くんだろう。

欠伸を一つすると、だいぶお腹が減ってきていることに気付く。先程コンビニで買ったパンを袋からなるべく音をたてないように取り出し、慎重に開けた。そしてそれをもふもふと食べはじめる。味は正直言って不味い。なんだこれ、と思うが空腹を満たすために口の中へと押し込む。食べながら、今度はもっと選んで買おうかな、なんてことを考える。

食べ終わった後は袋をたたんで戻す。まだ彼らの罵声は止まらないし、むしろ大きくなっているような気もする。そのうえ、皿の割れる音、ガラスの割れる音、何かを叩きつけるような音、何かが折れるような音などがここまで響き渡ってくる。

きーきー喚く女の声と、低い声で怒鳴り散らしている男の声。扉はぴたりと閉じているはずなのにここまで響いてくるということは、きっと外にも響いていることだろう。ご近所さんに迷惑が掛ってしまうだろうなあ。

なんてどうでもいいことを考えていると、だんだんと姿勢が辛くなってくる。膝を抱え、俗に言う体操座りをしていたのだが、一体どうしてそんな風に座っていたのかわからない。そんなに狭いところでもないのに。いや十分狭いけど、そんな座りかたをしなければいけないほどではない。脚を伸ばしてみると、少しだけ楽になった気がする。

さて、これからどうしようか。あれがいつ終わるのかは予想もつかないけど、それまでここにいるというのも本当は厭だ。でも面倒なことには巻き込まれたくないという気持ちの方が強い。誰だって、痛い目に合うのは厭なはず。ってさっきもいったっけ？ ……まあどうでもいいことだ。

しかし、運よくここまで彼らは来ていないが、今にもこの扉が開けられて、僕は引っ張り出され、ぼこぼこにされてしまう恐れもある。けれど下手にここから出たりなんかしてしまったら、彼らに見つかるかもしれない。

ああどちらにしろ、やられる運命なのだなあと思う。逃げることもできないし、立ち向かうなんて到底無理に決まっている。なら仕方ない。ずっとここにしよう。どうせ彼らはどちらかが死ぬまでやりつづけるだろうし。そして片方が亡くなると、僕を探して叩きのめすに決まっている。

でももういいんだ。短い人生だけど楽しかったなあ。いまごろぼくの友人たちはどうしているかな。ぼくが死んでしまったとしたら泣いてくれるかな。いやきっとそれはないだろう。どうせ学校の友人関係なんて、上辺だけの、薄っぺらい関係に違いないのだから。

そんな考えに浸っていると、ひときわ大きな音と、甲高い叫び声がした。それから先程までのようなものは聞こえなくなり、代わりにとんとん、と階段をのぼってくるような音が聞こえる。

あ、もう駄目だな、と確信する。きっと僕はいずれ彼、または彼女に見つかって殴られ、蹴られ、刺されてしまうんだ。もしかしたら殺されてしまうかもしれない。

死が目前に迫っている。そう思うと、何かやり残したことがあるような気がしてならない。なんだろう、と考えてみるが、こんな押し入れなんかではやれることなんか限られている。物はなにも置いていないし、よく考えてみれば特にやりたいことだってない。すると必然的にやり残したこともなくなる。なら何をしようか。この扉が開けられてしまう前に。……ああそうだ、現実逃避でもしよう。といっても、そんなに時間はないだろうけど、それでもいい。ぼくは今までの記憶をさかのぼる。楽しかったこと、嬉しかったこと、幸せだったこと。しかしなぜだかそれは思い出せない。逆に苦しかったこと、悲しかったこと、辛かったことが溢れるように蘇ってくる。

あれ、ぼくの人生ってこんなものだったのかと疑問に思う。いや、でもこんなものか。僕の人生なのだから、幸福であるはずがない。こんな世界に、こんな町に、こんな家に生まれてしまったのがそもそもの間違いだったのだ。ぼくが生まれてしまったことが。もしもぼくが生まれていなかったとしたら、きっと彼らも殺し合いなんかしなくてすんだのではないかと思う。結局そんなものか。気が付けば、足音がどんどんこちらへ近づいているような。ぼくは少し長く生き過ぎたかもしれない。まあどちらにしろもう終わりだ。まったく楽しい人生だったなあ。なんて素晴らしい人生だったんだろう。あはは。

(了)

ぼくの終りが近づく
<http://p.booklog.jp/book/63130>

著者 : minakami

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/logisch/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/63130>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/63130>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ